多文化をあきなう

社会を変えたくて
――アマチュアの「あきない」の素顔

佐々木 玲子（ささき れいこ）
日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）

「多文化をあきなう」。その「文化」は、担い手にとってどのようなものであるのだろうか。そこに思いをはせたとき、「あきない」はたんなる経済活動を超えることができるのかもしれない。日本ラテンアメリカ協力ネットワークが取り組むのは、「あきない」をとおした同時代に生きる人びと同士の共感である。

グアテマラとともに二〇年

グアテマラは、メキシコと国境を接する中米の国である。日本に似た山がちな地形に雨の多い温暖な気候で、高原に広がるトウモロコシ畑と色鮮やかな民族衣装のマヤ系先住民の人びとに会うことができる。一九六〇年からの三六年間、政府軍とゲリラによる内戦で推定二〇万人の先住民が死亡・行方不明になり、一〇〇万人が国内外へ避難した。しかし暴力を終わらせ平和な社会を作る運動も着実に展開してきた。日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）は一九九二年からこうした動きに支援を始め、今年で創立二〇周年を迎える。

マヤの女性たちに寄り添うために

暴力のもっとも深刻な被害者が先住民の女性たちである。内戦では生活と信仰の基盤であった家や畑を焼かれ、夫など主たる生計者と死別した。弔いも被害の告発もできない毎日のなかで、彼女たちは心身ともに疲弊した。復興後の経済発展が始まった今日でも、男性であれば出稼ぎや日雇いなどの就労機会があるのに、女性は育児や介護に追われ、それもできない。さらに男性優位思想からくる家庭内暴力の問題もある。

こうした女性たちが生計を立てるには何をすればいいのか。その答えのひとつが伝統の織物を売ることだった。シンプルな腰機（こしばた）を使った綿織物だが、マヤ文化圏（二一言語が話される）にある程度共通のモチーフをもちながらも、村ごとに色やレイアウトが異なり、その多様性・芸術性から「グアテマラの虹」と称（たた）えられている。織りを体得することは、彼女たちにとって、自分の村のなかでは一人前の大人になるための儀式であり、外では自分の所属を示す手段である。つまり自他共に認められるためにも重要なものなのだ。彼女たちの模索は、自分と自分の文化を肯定し、主体的に生きることにもつながる。女性たちは生活と伝統文化を再建・回復し、継続させてゆく主役でもあるのだ。

わたしたちはこの点に注目し、手織りの布製品を「民芸品」として日本で販売し、収益金を女性たちの支援に充ててきた。

RECOM創立当時、支援先の「つれあいを奪われた女性たちの会」（略称コナビグア）に対して、内戦中に軍に拉致され、山林で秘密裏に殺害された人たちの遺体発掘のために、車両を提供した。これにより山奥にも低コストで計画的に人や必要な機材を運搬できるようになった。また、治安上、活動が困難だった早朝や夜間に、移動することも可能になった。近年では、運営を担う会員が多く在籍するチマルテナンゴ県内で、女性の社会参画を促すプロモーター育成事業を五年間継続して支援した。この結果、市町村会議員に対し、女性局を設置するなどの対策を要請する人もあらわれた。

わたしたちが「フェアトレード」に近い事業ができるのは、これまで人権・平和の分野で築いた人脈を生かし、共通の行動目標を掲げるグアテマラ国内の団体のなかから、仕入先を探せるおかげである。輸入業者をとおさず、現金払いまたは郵便振替のみの単純な決済を採用し、収益金は一般会計とは別に「グアテマラ基金」口座で管理・運用している。二〇一一年度の残高は四五万円であった。小額なりにも、必要な人に必要な支援を届けているという実感が、わたしたちの原動力である。

ただ、収益をアップして安定的な財源に育てたいという思いはあっても、会の実働人員は商売の経験のない有志なので、独力では難しい。資金以前に人手が不足しがちな状況で効果的な支援をするには、会として目指すものの優先順位を決め、戦略を練ることが急がれる。

批判とともに成功を目指す

わたしたちのようなアマチュアの「あきない」には批判もある。生産コストを下げにくく、マーケティングやデザインのプロがいないために品質本位の競争に勝てる商品開発ができない、その結果スローガンほどには生産者に利益がなく、消費者も安くて良いものを手にできない、というのが代表例である。

ただし、わたしたちの考えはこうである。数あるモノのなかから民芸品を手にとってくれた人に、創り手の想いや暮らしを伝え、物理的距離や文化的な違いを越えた同じ時代に生きる者としての共感を呼び起こしたい。商品の優れた点も欠点も率直に伝えたあとで、その人が購入してくれれば、全員が納得のいく取引をしたといえる。かかわる人が愛着をもち、「きれいだな」と思えるモノを媒介にすることで、先進国の豊かな人が途上国の貧しい人を助けるのではなく、創る人と使う人という対等な立場に立てるようになる。

共感に根ざす「あきない」は、個人の経済的自由を保障し、集団の利害を調整し、文化的多様性を促進する機能をもちうるはずである。これを日常の買い物を通じて実現させた。

地球の資源、人間の労働力、そしてお金を、利潤追求だけではなく、互いが主体的に生き、平和に共存していくために用いる。そんな「あきない」はできるのか。それともこれはもう政治的な課題なのか。壮大な挑戦であるが、意識的に行動してこそ変化は起きる。わたしたちは、小さな国グアテマラの小さな村々で、小さな成功例になることで、「できる！」と答えようとしている。

内戦で夫を殺された女性たちをあらわす壁画

高原に広がるトウモロコシ畑

どこか日本人に似た面差しの子ども

今年三月の現地訪問。一緒に検品する

腰機で織物をする女性の壁画

布の端を手作業で始末する様子を拝見

天然染色が生み出す「グアテマラの虹」

フェアトレードのお店での委託販売